

うるま市  
文化財シリーズ ⑥

# 勝連城跡

Katsuren-jō Site



琉球王国のグスク及び関連遺産群

国指定史跡 世界遺産登録



## うるま市文化財シリーズ⑥ 勝連城跡

---

- 2 勝連城跡の概要
- 4 勝連城跡の歴史
- 6 勝連の按司の系譜（伝承）
- 8 名高き王『阿麻和利』
- 10 百度踏揚（ももとふみあがり）
- 12 勝連城跡の5つの時代
- 14 勝連城跡MAP
- 18 城内拝所（御嶽）
- 20 勝連城跡周辺の文化財
- 22 国指定史跡勝連城跡の整備
- 24 ボランティアガイドのお知らせ





## 勝連城跡の概要

勝連城跡は、勝連半島の南風原の小高い丘に築かれた東西に細長いガスクで、五つの曲輪からなり、各曲輪は珊瑚質石灰岩の切石を使って曲線状に築かれています。東西に展開する丘陵の端部と一部の谷間を巧みに利用した姿は、巨大な進軍船にも例えられています。丘陵の西側が最も高い曲輪が一の曲輪で、東側へ二の曲輪、三の曲輪、四の曲輪と階段状に低くなり、東の曲輪は再び高くなっています。

標高約98mの琉球石灰岩丘陵上に築かれたガスクは、北は遙か金武湾を囲む北部の山々や太平洋側の島々が見え、南は知念半島や中城湾、それを隔てて政敵磯佐丸の居住である中城城が一瞥できる爽に景勝地となっています。

四の曲輪の南西側に「南風原御門（はえぼるうじょう）」、北東側に「西原御門（にしはらうじょう）」と呼ばれるアーチ式の門があったといわれています。また、この曲輪に

三の曲輪と二の曲輪は約2mの段差があり、石積みによって仕切られています。二の曲輪には東西14.5m、南北17m規模の舎殿跡があり、覆土によって遺構を保存しています。西側には抜け道伝説がある『ウシヌジガマ』と呼ばれる洞穴があります。三の曲輪と二の曲輪は一見独立した曲輪のように見えますが、二の曲輪が舎殿跡の基礎部であり、三の曲輪はその前底部になっています。その舎殿跡は礎石を配し、壁下石列と軒下には雨落溝が取り付けられています。舎殿跡の隅から石畳が取り付けられ、頂上の一の曲輪へと続きます。途中から石段となり、一の曲輪の城門へとつながります。

この城門は他の曲輪の城門と同じようにアーチ式の城門であったと考えられており、また礎石式の建造物もあったようです。このときの建物の屋根は瓦葺きであったと考えられています。

四の曲輪の南東側には一段高くなった場所があります。その箇所は、別名「東の曲輪」と呼ばれる城壁が巡り、水場を確保する上でも軍事的にも重要でありました。

は五カ所の井戸と建物跡を推測させる礎石もあります。

南風原御門から上段の三の曲輪へ石畳道がとりつけられており、三の曲輪は儀式などを行う広場と考えられています。石畳道を登りつめたところに三の曲輪の城門があります。4個の礎石が据えられているので、木造の四脚門があったと考えられています。この曲輪は広い平地ですが、礎石以外には建造物はみつかりません。



# 勝連城跡の歴史

勝連城跡は、沖縄の英雄『阿麻和利』の居城として有名ですが、先史時代後期末から古代人の生活地として利用され、12～13世紀に築城されたものと考えられています。口碑伝承によると、初代城主は英祖王系・大成王の五男であったと言われていいます。その後勝連按司は四代続き、六代目に世継ぎができないことから養子縁組により伊波グ

スクの伊波按司の六男が迎えられています。続く七、八代目の交代の理由は判りませんが、濱川按司になっています。そして九代目は茂知附按司となります。しかしこの按司は圧政を敷き酒に溺れたことから、人々の信頼の厚い阿麻和利によって倒されます。彼が十代目の城主となって、勝連はますます栄えることになったとあります。



一の曲輪

二の曲輪

三の曲輪

ハエバムウジヨウ  
南風原御門

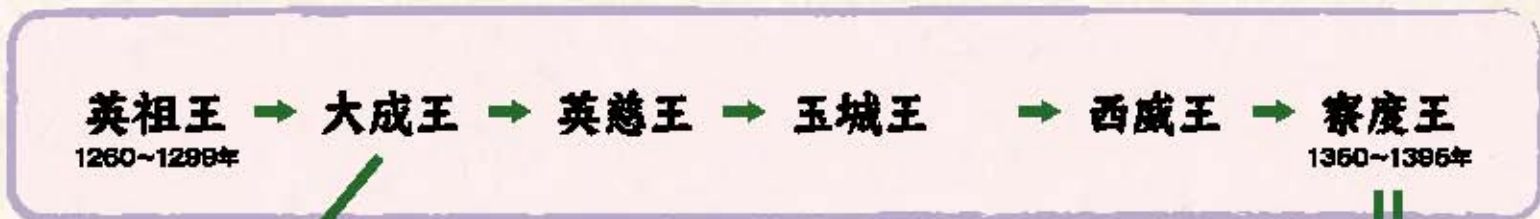
四の曲輪

ニシハラウジヨウ  
西原御門

東の曲輪

想定復元画 / 藤井高夫氏

# 勝連の按司の系譜 (伝承)



(五男)

(娘)

(娘)

(娘)

(夫婦)

(付役)  
(阿麻和利の死後夫婦)

(夫婦)

(夫婦)



護佐丸の娘



真鍋樽

勝連の阿麻和利  
 十百歳 らよわれ  
 又肝高の阿麻和利  
 又勝連と 似せて  
 又肝高と 似せて

阿麻和利の伝説 阿麻和利の伝説は、  
 千尋の淵に落ちた阿麻和利の  
 伝説は、阿麻和利の伝説は、  
 阿麻和利の伝説は、

勝連の阿麻和利  
 阿麻和利の伝説は、  
 阿麻和利の伝説は、  
 阿麻和利の伝説は、  
 阿麻和利の伝説は、

阿麻和利の伝説 阿麻和利の伝説は、  
 阿麻和利の伝説は、  
 阿麻和利の伝説は、  
 阿麻和利の伝説は、

名將帝王

# 阿麻和利



の姿を聞いて驚いていました。その様子をそっと見ていた加那は、村人たちが多いてくるのを難儀した上で茂知附後司に「勝連城跡を攻める敵の軍勢に強い」と言いました。酒に酔っていた茂知附後司は僅て物見台に駆け上がりたいまつを行列を見ようと身を乗り出したところを加那に突き落とされたのです。加那は茂知附後司を倒し、城主の座を奪い取ったのでした。

若くして勝連の後司となった阿麻和利は、人々から慕われ、海外貿易によってますます力をつけていきました。時の琉球国王尚泰久は、阿麻和利に脅威を持ち、自分の娘の百度階姫を嫁がせました。阿麻和利は勢力拡大を目的として中城後司能佐丸を亡ぼし、中山王と争って首里を攻めました。しかし敗れ勝連城にたてこもりましたが、首里王のまわし者であった鬼大城によって討ち滅ぼされ1455年敗死し、彼らの生活を閉じることとなりました。

阿麻和利については諸説ありますが、一般によると北谷間切屋良（現在の嘉手納町）で百姓の子、加那（のちの阿麻和利）が誕生しました。加那は10歳になっても歩くことも満足にできない身体の弱い子供であったため、山に捨てられてしまいました。ひとりで生きていくことになった加那は、ある日くもが巣を張るのを見て、魚をとる網を発明したと言われていす。海や山を駆け回り、たくましくなるにつれて生きていくためのいろいろな知恵や力をつけていきました。

勝連にたどり着いたとき加那は一人前になり勝連後司の馬の草刈り役としてやとられるようになりました。村人たちは魚とりの網をつくり、慕われるようになりました。その頃の後司が酒飲に溺れる茂知附後司でした。加那は村人の協力を得て翌年6月29日の晴い晩に、村人の両手にたいまつを持たせ、勝連城下廻りを目指しゆっくり歩いてくるように言いました。城ではいつものように家臣を集め新

百度踏み揚がりや  
 けさよりや 勝利  
 百ぢやらの 主とぞ  
 成りよわらへ  
 又君の踏み揚がりや

百度踏揚は、第一尚氏王統の豊稔への功臣たる夫・鬼大城が、知花グスクで殺されたときに、彼女の女としての不幸はきまるといえます。口碑によれば、鬼大城は主家によって除殺されたともいわれ、第二尚氏王統によって攻伐されたともいわれます。どちらにしても、政治絡みの血みどろな権力闘争によって2人の夫を失ったことに変わりありません。非情な政略結婚の犠牲者であることは言うまでもないでしょう。

美しい「御城の花」踏揚は今がて島尻玉城村へ生き延び、寂しい隠居生活を余儀なくされます。踏揚は動乱の時代、悲劇の王女でした。お墓は玉城村區名屋にあり、鬼大城の眠る知花の墓には合葬されていません。

百度踏み揚がりや  
 道 開けて  
 金比屋武 手磨て  
 又君の踏み揚がりや

百度踏揚は、第一尚氏王統の豊稔への功臣たる夫・鬼大城が、知花グスクで殺されたときに、彼女の女としての不幸はきまるといえます。口碑によれば、鬼大城は主家によって除殺されたともいわれ、第二尚氏王統によって攻伐されたともいわれます。どちらにしても、政治絡みの血みどろな権力闘争によって2人の夫を失ったことに変わりありません。非情な政略結婚の犠牲者であることは言うまでもないでしょう。

「ももと」は百に十を意味する、すなわち「いつまでも」の意で、「ふみあがり」は「踏んで揚がる」すなわち「秀でる」「名高い」の意で、気高く美しいと讃えられました。百度踏揚と阿麻和利は水入らずの時間を過ごす機会はとて少なかったはずで、その頃の阿麻和利は、王統たる地位を利用して、威勢を張り運らしていたためでした。阿麻和利のクーデターを覚悟させた鬼大城と踏揚は首里へ走り出しました。そして、王の命令で阿麻和利が鬼大城(大城賢勇)に討伐されると、大城氏と再婚しました。

「おもろさうし」に「百ぢやらの主とぞだ、成りよわらへ」などがあり、王女として得意の絶頂にあったことがわかります。また、重力だかい神女としての活躍ぶりを伝えるおもろさう

# ももとふみあがり 百度踏揚



# 勝連城跡の 5つの時代

## 形成期 (I期・12世紀以前)

形成期は、貝塚時代と呼ばれる時代の終わり頃にあたるものです。貝塚時代の土器だけがでてくるので、すくなくとも、12世紀よりは古い時代と考えられています。

## 興隆期 (II期・12～14世紀)

興隆期は、按司が登場する前の時期です。瀬戸内器とともに中国宋代(13世紀)の中国製陶磁器、動物の骨のサイコロ、碁石、鉄製品などが発見されました。この時期の基盤には砂岩が風化した土(ニービ)を持ち運んできて、埋め立て築地を行っています。この埋め立てられた土に据って柱の小規模な建物跡が発見されています。また堀列があったことがわかっていて、堀列により防御施設が存在が考えられています。勝連城跡の築城年代はこの時期だとされています。

## 最盛期 (III期・14世紀初め～14世紀中葉)

最盛期は、琉球王国統一以前の中山王英祖王系(大成王の五男)の勝連按司からの時代で、5代続きました。この時期には、中国元代の中国製陶磁器、鉄製品、古銭、玉類が出土していて、特に興隆期より陶磁器の増加が目立ちます。またこの時期には大がかりな埋め立て工事が行われ、城壁など勝連城の形がある程度整っていた時期だと考えられます。

## 安定期 (IV期・14世紀後半～15世紀)

安定期は、現在見る勝連城が確立した時期です。城主は、6代目伊波按司から浜川按司が2代続き、茂知附按司そして阿麻和利へと交代する時期です。この時代の層から出てくるものとして、最盛期の遺物の他に、大和系瓦、鍔の小札、矢じり、刀などの武器、武具類などもたくさん発見されています。この時期の中国製陶磁器は、中国の14世紀後半から15世紀前半の代表的な焼き物であり、染付や青磁は大形の壺や瓶が多く、世界的に見ても数が少ない貴重なものでした。そして二の曲輪には石をもった瓦葺きの建物(倉庫跡)が建てられていました。その貴重な陶磁器や礎石をもった瓦葺きの建物からみて、栄えた時代であったと考えられています。阿麻和利が城主となった際には、海外貿易によって勝連がもっとも栄えた時期だろう。

## 衰退期 (V期・15世紀後半以降)

衰退期は、中国明時代の15世紀以降(明代)の中国の焼き物である染付や白磁、青磁などが発見されました。その他寛永通宝も発見されています。1468年に阿麻和利が首里王府によって滅ぼされた後も、勝連城が何らかの形で使われていたということになります。

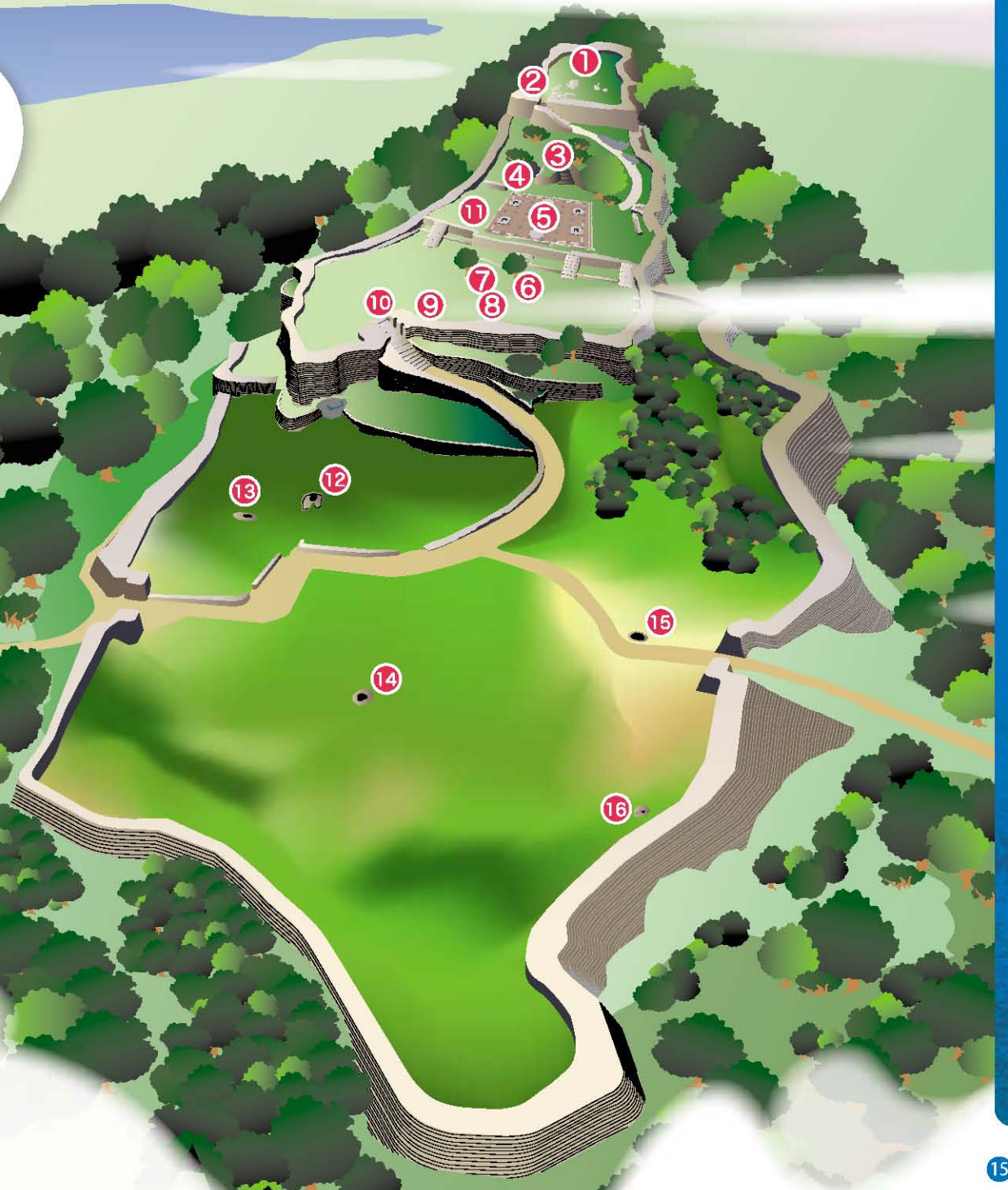






# 勝連城跡 MAP!!

- ① 玉ノミウチ御嶽.....P18
- ② 一の曲輪城門 .....P16
- ③ ウシヌジガマ.....P18
- ④ ウミチムシ (火の神) .....P18
- ⑤ 三の曲輪殿舎跡 .....P16
- ⑥ 肝高の御嶽 .....P18
- ⑦ トウヌムトウ .....P18
- ⑧ すり鉢状遺構 .....P16
- ⑨ 埋葬人骨 .....P17
- ⑩ 三の曲輪城門 .....P17
- ⑪ 二の曲輪基壇 .....P17
- ⑫ ミートゥガー .....P19
- ⑬ ウタミシガー.....P19
- ⑭ 仲間ヌウカー (カンジャガー) P19
- ⑮ 門口のカー .....P19
- ⑯ ヌールガー .....P19



## 一の曲輪城門

一の曲輪の城門は、アーチ門形式で、捲鬚状の彫刻が施された希にみる城門であったと推測されます。



勝連城跡MAP ▶▶ ②

## 埋葬人骨

1985年の発掘調査で、三の曲輪南東側より1体の埋葬人骨が発見されました。この人骨は保存状態も良好でした。14～15世紀に属するもので、年齢は約4才の幼児で性別は不明です。



勝連城跡MAP ▶▶ ⑨

## 二の曲輪殿舎跡

二の曲輪のほぼ真ん中に、間口（横幅）約17m、奥行き（縦幅）約14.5mのやや長方形をした舎殿跡が発掘されました。

この建物は、ニービノフニ（硬砂岩）を利用した礎石立建物でした。首里城正殿のような柱の多い構造の総柱建物で、瓦葺きの仏殿風建物であったことが推測されます。建物の4カ所に石灰岩切石を方形に積んだ施設が発見されています。周囲及び内部には崩壊した積石が埋没していた他は、特別な遺物や焼土・炭などはなく、どのような施設であったかは不明です。

なお、この建物は曲輪内の配置と規模から政治的な表舞台を演出する施設だったと考えられます。



勝連城跡MAP ▶▶ ⑤

## 三の曲輪城門

四の曲輪から細く長い石畳道を上がり詰めた部分に内郭の門がありました。この門は礎石の存在から4本柱の薬医門が想定されます。



勝連城跡MAP ▶▶ ⑩

## 二の曲輪基壇

二の曲輪と三の曲輪の境は石灰岩切石積の壇になっています。この壇は南北全長約41mではほぼ一直線に作られています。南側では約2m奥に入っていますが、この石積は一時期古い基壇面と推測されています。このことから二の曲輪の舎壇は少なくとも2度の普請が行われています。また、この基壇はこのゲスクにおいて数少ないオリジナルの石積が残っている箇所でもあります。布積みといわれ琉球石灰岩を直方体に加工した石を積み上げます。横目字が通り品字に積む特徴から『豆腐積み』ともいわれます。



勝連城跡MAP ▶▶ ⑪

## すり鉢状遺構

三の曲輪の中央に凹型の土壌が2カ所発見されています。どのような施設であるか不明ですが、粘土で成形していることから、水を溜める施設ではないかと推測されています。



勝連城跡MAP ▶▶ ⑧

# 城内拝所(御嶽)

# シルウチヌカー

## 玉ノミウチ御嶽

(通称:タマチンの御嶽、コバツカサノ御イベ)  
勝連城跡一の曲輪にあり、大きな岩がご神体の御嶽である。そこは、一年中シディガフウ(御札)や諸方への拝みのお通しをすところす。



勝連城跡MAP ▶▶ ①

## ウシヌジガマ

勝連城跡二の曲輪にある洞穴で、天災や戦争のときに身を潜めて難を逃れた場所でした。調査の結果、このガマ(洞穴)は外部への通り抜けは出来ずに単なるガマと判明しました。



勝連城跡MAP ▶▶ ③

## ウミチムン(火の神)

勝連城跡二の曲輪にあり、城の台所でした。この火の神から次の六ヶ所へのお通しの拝みをする所です。

- ①クミシンテラ(上) ②クミシンテラ(下)
- ③マースダチャー:ニーガシラー石のあるところで、昔、天日製塩か塩田のあったところ。
- ④ヤブチ島(藪地島):ヤキナウカー等四ヶ所
- ⑤浜比嘉島:アマミキヨ、シルミキヨの男女二神と幾柱かの神々が合葬されている古墳がある。
- ⑥津堅島、久高島



勝連城跡MAP ▶▶ ④

## 肝高の御嶽

(通称:チムタキの御嶽、イシツカノ御イベ)  
勝連城跡三の曲輪にあり、城内へ登城するときの控え場所でした。ウマチーのとき神人(カミンチュ)が城拝みに行ったときの休憩場所であり、座石も置かれています。ウマチーには神人たちの前で若者が「イユコーンソーリー」(魚を買いなされ)と呼ばけ廻りました。



勝連城跡MAP ▶▶ ⑥

## ナカヌウタキ

勝連城跡二の曲輪にあり、ヒヌカン(火の神)とウシヌジガマを含めた地域を言います。



勝連城跡MAP ▶▶ ③ ④

## トウヌムトウ

旧暦の2月と5月に行われる祭祀(ウマチー)の時に神人たちが腰掛ける石列がトウヌムトウと呼ばれています。いつの頃から置かれたかはわかりませんが、民俗資料として大変重要なものです。



勝連城跡MAP ▶▶ ⑦

## ミートウガー(夫婦ガー)

勝連城跡四の曲輪右側にある井戸です。そこは、夫婦縁結びの川(井戸)とも言われ、城内からは出られない若者達がそこで恋物語をしたらうと言われていました。昔からの口碑によると、「井戸のそばで恋物語をするな」と言われています。話がまとまれば永遠の契りとなり、失恋すると、男女のどちらかは死別すると言われていました。

勝連城跡MAP ▶▶ ⑫



## ウタミシガー

勝連城跡四の曲輪左側にある井戸です。現在でも水が溜まっています。旧正月元旦の初拝みのとき、この井戸の水が豊富にあるときは『サーイ年』(早魃の年)、水が少ないときは『ユガフーの年』(豊作の年)と言われ、一年間の豊作か凶作を占う井戸です。又この井戸は、雨乞いの拝みをする場所です。

勝連城跡MAP ▶▶ ⑬



## 仲間ヌウカー(カンジャガー)

勝連城跡四の曲輪ほぼ中央にある井戸で、南風原御門(ハエバルウジョウ)の東側にあります。仲間の鍛冶(カンジャー)の使用水として利用された井戸です。

勝連城跡MAP ▶▶ ⑭



## 門口のカー

勝連城跡四の曲輪の入口にある井戸で、西原御門(ニシハラウジョウ)があった北隣にあります。そこは、身分の低い家臣が使用した井戸です。そして、外部から城内への訪問者が、手足を清めるために使用された井戸でもありました。

勝連城跡MAP ▶▶ ⑮



## ヌールガー

城内にあるノロ家の井戸です。ただし、この井戸は『ナケージガー』であるという説もあります。

勝連城跡MAP ▶▶ ⑯



# 勝連城跡周辺の文化財

## 南風原古島遺跡

勝連城跡の南東側の斜面地域に大きく展開する古く時代の集落遺跡です。1986年に大規模な宅地整備が計画され、記録保存の発掘調査が実施されました。その結果、勝連城跡の麓に展開する集落の石室遺構が発見されて注目されています。また、城から分配された陶磁器類が多数出土しています。



## マーカージャー

マーカージャーは、元島原の大岩の下にある降りカー式の井戸です。字の繁栄を願う拝所の一つで、元島原にあった頃のウブジャーでした。神拝み時、このカーで手足を清めて勝連城内に登ったと伝えられています。



## 浜川ガ一 (ハンガーガ一)

浜川ガ一は絶世の美女真鍋樽(マナダルー)の頭髪を洗髪したことで有名です。真鍋樽は、勝連城7代目の城主浜川按司の娘で、彼女の頭髪は身長1.5倍もあり、竿にかけて洗ったという伝説があります。

南風原が元島原にあった頃のウブジャーでした。現在でも毎年旧正月元旦に南風原及び近隣集落の門中によって、「カーウビー拝み」が行われています。



## ビーンガ一

ノロ殿内以外の門中(宇保理、仲間、備保、東江、兼元など)で神人が生まれた時このカーで身体を清めて初めて神人になったと言われており、拝みの際もここで身体を清めてから登場したと言われていました。



## アコージガ一

県道16号線から数十メートル南に入った所にあり、下人民が使用した井戸で、昔はこのウカーの前を通過して城内に登城する道路がありました。



## 按司墓

与勝府院の南側の崖下であり、岩に掘りこまれた墓です。通称、赤ジン原と言われていました。石があまりにも硬く、墓を掘るのに掘り出した石粉1升に対して、米1升の堀賃を払って仕上げたという口碑が残っています。墓は、入口から①門口番の御墓、②御門番の御墓(ウジョウバンヌウハカ)、③ノロ殿内クサイの御墓、④備保クサイの御墓に位置しています。



## アガリガ一

集落の東側に作られた井戸です。旧藩時代は、公儀(クージ)の許可がなければ個人用の井戸は掘れません。よって村内の要所三ヶ所に共同井戸が作られました。元島原にあった頃のウブジャーでした。



## マンナカガ一

マンナカガ一は、集落の中程に位置しています。アガリガ一、イリーガ一、アシビナーのカーと築造技術や形態がよく似ており、村宿移動した1726年頃同時期に築造されたものと考えられています。沿革はアガリガ一と同じで、ともに現在は使用されていません。



## イリーガ一

集落の西側に作られた井戸です。別名ニーヌファウカー、ウブガ一とも言われていました。沿革はアガリガ一と同じです。



## 南風原の村獅子

村のフーチゲシ(邪気払い)として、南風原村が勝連グスクの南側より移動した際(1726年頃)に、村の境界として東西南北の四角に置かれたと伝えられています。





明治期の勝連城跡（資料提供：琉球大学付属図書館）

## 琉球政府による保存修理事業

勝連城跡は、昭和39年、40年及び昭和46年の調査を踏まえて、昭和42年4月11日付で当時の琉球文化財保護委員会により史跡指定を受けました。文化財保護委員会によって調査は1965年から1968年まで4年間継続調査されました。調査から城郭や城全体の構造を明らかにすることができました。

## 国指定史跡勝連城跡の整備

昭和47年（1972年）沖縄の日本復帰と同じ年に国の史跡に指定されます。勝連城の調査は沖縄県教育委員会から指導を受ける形で遺跡分布調査、発掘調査、史跡整備事業などが行われるようになりました。昭和51年度から「保存管理計画」に基づいて昭和52年度の一の曲輪北西側石積修復工事を初めとして「史跡勝連城跡保存修理事業」として整備事業が継続的に実施されています。現在は四の曲輪の整備を進めています。

# ボランティアガイドの お知らせ



勝連城跡では、「うるま市史跡ガイドの会」のメンバーが案内活動を行っています。一週間前までに、休憩所窓口を通して案内依頼をすると、団体・小グループ・ご家族連れ等無料で案内が受けられます。

また、毎週水曜日の午後2時から午後5時までは、定例の活動日になっていますので、自由に案内が受けられます。

その他、うるま市内の文化財を巡る半日コース、1日コースを設定した案内を行っていますので、ご希望の団体は休憩所窓口を通してご相談下さい。

勝連城跡休憩所 TEL.098-978-7373



かつれんわ てた むかて  
ぢやう あけて  
またま くがに よりやう  
たまのみうち  
又 きむたかの つきむかて  
又 かつれんわ  
けさむ みやむ  
あんし えらぶ

平成二十三年

元旦

勝連城跡の夜明け、神々しい光の中で勝連城跡に夜明けが訪れる。



沖縄県うるま市教育委員会 文化課  
〒904-2226 うるま市字仲瀬 175 番地  
☎098-973-4400

